

# 新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。  
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



## 道

道は垣根にそっていく、  
お堀や畑にもそっていく。  
坂ならたらたら下りていく  
丘ならうねうねのぼってく。  
森や林はぬけていく、  
小川や溝はまたいでく。  
子供が縄とびしていても  
牛がながながねていても  
いたちがついとよぎっても  
霞が遠くをかくしても、  
道はけっしてとまらない、  
道はけっして迷わない  
そしてどこかへいつちまう  
どこかへ道はいっちまう。

本城まい子  
イラストレーター  
futaoppo-opera.petit.cc/

最近ワークショップなどで  
子どもたちと遊んでいます。

絵について

「道」の最後の二行が特別好きです。  
淋しいような怖いような、自由なような。

## 新美南吉



にいみなんきち  
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

## 解説

南吉の作品を見ると「おじいさんのランプ」「煙の好きな若君の話」「家」など道に大切な役割を与えている物語がたくさんある。これは畳屋と下駄屋を営んでいた南吉の生家が、東海道の裏街道ともいわれる大野街道の分岐点にあり、店の前を通り過ぎていく旅人や物売りなどに特別な興味と関心を抱き、眺め

育ったということも深く影響している、と思われる。南吉にとって道は単なる道ではなく、人生を暗示するものであったのだ、ということが彼の種々の作品からうかがえるのだ。本作は道が意志を持った人のごとく旅をして歩くところが、なんと面白い。「道」は1934(昭和9)年12月9日の作である。

## 解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を勤める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。